

呼也呼者謂此鳥善舒气自叫故謂之鳥取其助气故曰為鳥呼此許語也取其字之聲可以助气

與朋為朋黨草為皮草來為行來西為東西止為足子為人稱一而詩皆云於乎中古以來文籍皆為鳥一

也匡繆正俗曰今文尙書悉為戲字古文尙書悉為鳥呼字而詩皆云於乎中古以來文籍皆為鳥一

呼字按經傳漢書尙書呼無有作鳴呼者唐石經誤為鳴者十之一耳近今學者無不加口作鳴殊乖大

雅又小顏云古文尙書作鳥呼謂枚呼頃本也今文尙書作於戲謂漢古經也洪适載石經尙書殘碑於

戲字尙四見可證也今凡鳥之屬皆從鳥然古文鳥象形於象古文鳥省而省之亦單省為革之類此

匡繆正俗古今字互譌也今凡鳥之屬皆從鳥然古文鳥象形於象古文鳥省而省之亦單省為革之類此

注蓋古文之後出者此字既出則又於為古今字釋詁毛傳鄭

字經皆云于於也凡經多用子凡傳多用於而鳥不用此字

〔類聚名義抄〕九鴉鴝俗正カラス、鸞鳥音豫鸞鴝鴝為鳥音惡カラス一名鴝

〔下學集〕上鳥カラス 鳥カラス 義三字凡

〔和爾雅〕六鳥カラス 鳥カラス 義三字凡

〔八雲御抄〕三下鳥なつとも やもめ ふたつ むれ こもち あさ 夜 月夜 やま

三むれ稻荷社 やた 神宮御使在天 もり玄る 在杜由也 おほをそ鳥 異名 からの頭玄ろ

きといふは燕太子歸時相也

〔藻鹽草〕十鳥

夏鳥 とも鳥 ねぐらもとむる鳥 朝鳥 むら鳥 やもめ鳥 ふたつ鳥 むれ鳥 二もち

鳥 夜鳥 月夜鳥 山鳥 三むれ鳥稻荷社 やた鳥 神宮御使 もり玄る鳥 在杜

だれからすのよた 鷹鳥 さち鳥狩場にとらるい想也と云々 鳥の頭白きと云燕太子歸 日

もす日本紀に おほをそ鳥略註 鳥はむくひをかへす鳥といへり孝の 山鳥うときかたへ

にわらはれぬべし

〔萬葉集〕十四歌四相聞

可良須等布於保乎會杼里能麻左低爾毛伎麻左奴伎美乎許呂久等會奈久

〔壺囊抄〕五オホヲソ鳥トハ何ナル鳥ゾ